

③ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー

これは平成七年度に補正予算で新たに認められた仕組みであり、わが国の基礎技術開発あるいは先端的、独創的な技術開発が、諸外国に比べてその分野が非常に弱いことでもあります。

企業は直接お金になる製品開発を行い、大学は基礎研究にウェイトを置いているなかで、その間の隙間を埋める必要があるという意味で、ベンチャー・ビジネスの振興に役立つための新しい仕組みを設けたのであります。

五. 今後の方向

今後の改革の方向性として、私としては

次の三つを考えています。

①創造（創造的人材養成）

その一つが「創造」です。日本がこれから国際的な貢献を果たす場合、従来型の諸外国の基礎研究を拝借してきて、企業が適当に製品開発につなげることはすまない状況になっていくのは明らかであり、創造的な研究、創造的な新産業というようなのを作っていくかなければならない。

そのためには、大学自身における教育研究が創造性をもっと重視していくことが、社会的に強く求められているのではないかと思います。

②総合（インター・ディシプリナリーとトランス・ディシプリナリー、教養教育改革）

第二の課題としては「総合」ということで、従来のディシプリンだけでなく、インター・ディシプリナリーなり、あるいはトランス・ディシプリナリーなりの研究を進めて行くべきです。

大学院を重点的に整備する大学では、学部教育の位置づけをどうするのか、教養教育と専門教育をそれぞれどうするのか、規模をどうするのか考える必要があります。その上で大学院教育を整備し、大学院重点化へ導いていく必要があります。

③発信（知的創造拠点）

第三の課題として「発信」です。広島大学が知的な創造拠点として、広島地域の振興のために生涯学習の面で貢献をされ、あるいは産業の振興という観点から、広島大学のベンチャー・ビジネスは全て広島大学に端を発した研究教育が基盤となり、世界に雄飛していくようになっていただきたい。

最後に個人的意見ですが、創造的な研究、創造的な人材養成という意味で「創造」、それから教育面でも研究面でも「総合」、さらに大学として社会的な貢献をしていくための「発信」というこの三つを参考にしたい、広島大学は改革を進めていただきたいと思えます。（ときわ・ゆたか）



広島県教育委員会教育長

寺脇 研

高等学校改革の視点

今日、私は、高等学校教育がどのように変わっているのか、また、変わっていくのかということをお話したいと思えます。

高等学校は、もう、全ての子どもが行く場に限りなく近くなっていますが、そこから大学へ接続していく子どもたちの教育にどのような考え方があったのかということを中心にお話します。

学習指導要領の改訂と

高等学校の教育改革

高等学校の教育は、平成六年度から新しい学習指導要領が実施され、それによって変わったわけですが、この学習指導要領は、

十年に一度ぐらい変わってきております。

今回の学習指導要領の改訂は、もちろん、いつものように小学校、中学校、高等学校セットで行われており、小・中学校の場合は、一斉にその年度から全ての生徒がその体制に入るわけですが、高等学校の場合は学年進行ですので、平成六年度入学の生徒から、新学習指導要領の体制に入っております。

高等学校の学習指導要領の改訂は、今回は革命的变化だと言つてよいと思えます。日本の初等中等教育は学習指導要領の法則のもとに行われていますが、高等学校に關して言えば、もうこの法則は無くなったと

理解していただきたいわけです。

小・中学校の学習指導要領の狙いは、いい意味での画一性を保とうとしているものですが、高等学校に關して言えば、もう何をやってもよいわけです。

小・中学校は義務教育であり、いざんとして学習指導要領に掲げている科目以外教えてはいけないし、何を教えるかということが全部決まっていますが、高等学校はフリーカリキュラム制であり、大学にどんな近づいているということ。高等学校では、全体の約三分の一を必修として、残りは教科の枠さえ守れば、その中でどんな科目を開設しても構わなく、学校裁量で科目が開設できるようになっています。大学でも必修科目はありますが、高等学校は非常に必修科目を狭めて、あとは自由にやっっていくということです。

平成五年度から、単位制の高等学校が認められるようになり、今回の改訂では、カリキュラム自体を非常にフリーなものにする

ると同時に、学校制度もそれに抽車をかけてフリーな制度にしています。

そのことは、単位制を導入したことがきわめて大きく、どの子どもも同じ授業を受けて三年間を終えるという考え方は過去のものであり、学年制の高等学校でも、選択履修を文部省の方から奨励しています。

しかしながら、普通科高校と専門高校では、やはり関係科目を大幅に履修するように決められています。普通科高校と専門高校の二本立て体制を維持していたのでは、フリーカリキュラムといつても完全にフリーとは言えません。そこで、第三のカテゴリーとして、総合学科というものを新設したわけです。

この総合学科では、ほぼ大学と同じ考え方によって、非常に多くの科目を開設するなかで、必修科目として学校が課している以外は、生徒が自分で選んで科目を履修するというものであります。広島県でも、今年四月に高陽東高等学校を総合学科に全面

ことは事実です。ところが百年生きる事になつてくると、自分はこんな時代まで生きるという考え方がなかつたため、極端ですが、やる事がなくなり何の生きがいもない、ということも現実であります。

生涯学習は、お年寄りの勉強であるという誤解があるのは、ここに問題が噴出してきているからですが、人間は六十〜七十歳になつていきなり生まれるわけではなく、第一ステージからの学校教育の持つ役割が重要です。学校教育が変質しようとしているのは、いい大学に入れたということでもなかった今までの学校教育だけでなく、第三の時期に心豊かに生きることが考えていかなければならないということです。

### 高等学校の改革

高等学校改革は、生涯学習時代に合った高校にしていく必要があります。そのためにはまず、総合学科を作ること、中学校進路指導を偏差値偏重から改めることであります。それから、高等学校で家庭科を男女ともやることです。

今度専門学校になつた職業高校について、普通科が上で職業科が下であるとか、普通科にいかないと大学へ進めないというような誤解を正していくと同時に、現実も、普通科からでないといふ大学に行きにくいというような状態を正していくことです。(広島大学でも、専門高校選抜枠を作ってもらいたいと思います。)

家庭科の男女必修については、この時代を心豊かに生きるためには、衣生活、住生活が大事です。衣・食・住生活に対する興味関心、わくわくしたものがないと、百年も楽しく生きていけません。センター試験の科目にするために家庭科を必修にしたわけではなく、人間が人間らしく百年を生きるために必要である、ということなのです。

男子も女子も家庭科をやるような体制づくりをする必要がある、ということなのです。

昭和二十年代は、社会の要求と学校教育が合っていました。しかし、学校教育はそのままだよってきまされたが、社会は変わってきたため、ずれが大きくなってきています。今回そのずれを修正するために改革しましたが、修正する直前がそのずれが一番大きいわけで、学生が何をしに大学に来ているのかわからない、と大学の先生はよくお嘆きになります。

大学には入りたくないけど、勉強はしたくない。勉強はしないのに、義務教育でない学校に進みたい。そういう子どもたちを作ってしまったわけです。そこを抜本的に改めたいかなければなりません。

大学だって勉強意欲に燃えた学生が欲しいはずなんです。そのためには、大学の入学試験も、講義のレベルについていける英語、数学、国語の力があるか、という選び方ではないかと思えます。高校も同様であったので、偏差値的なものだけで見るとなると、意欲とか、クラブ活動とか、いろいろなものによつて、高等学校で何が学びたいのかということを見ることで対応しようとしております。

高等学校教育を改革するというのは、勉強がしたくないという子供には、実験実習を中心とした社会的即戦力になれるようにしていこうという考え方があります。と同時に、大学へ行く子供には大学へ行くモチベーション、何で大学へいくのかということをやつていく必要があります。また、中学校が高校の予備校でないと同じように、高校も大学の予備校ではなく、七年間の教育という考えから、高校でやることと大学でやることは、遅いか早いのかの問題だということを理解する必要があります。これが、専門高校特別枠を作つてほしいということ

です。

高校時代には、実験実習などはしなくて、基礎的な英語、数学の力だけつけて、大学に入つてから実験実習をすればよいというのは、三年教育と四年教育に分れていた時の考え方でありました。これを七年教育にする、専門学校に入る段階では大学進学しなくていいと思つていたが、実験実習をしているうちに、大学に進学したくなる子どもたちが多くなりまして。

高校時代は実験実習をしないで基礎学力をひたすら高めてきた学生も大学は受け入れるが、実験実習をしていこううちに大学進学を望むようになった子どもたちを、大学は受け入れるのか受け入れないのか、ということが問われているのだと思えます。

実例を上げますと、三年前に作つた県立高校の福祉科が、今年初めて卒業生を出しました。約四十名の入学者の中で、本当に入学したいと思つてきた子どもは三分の一ぐらいで、残りの三分の二は偏差値輪切りでここから入れるというものでしたが、出るときには、二人を除いて全員が福祉関係に進学または就職しました。これは実験実習をしていくなかで、福祉関係の仕事に意欲が出てきた結果であります。

特別養護老人ホームでの実習を見ました。が、眉一つ動かさずにオシメを交換していただきました。今頃の若者は汚いことを嫌がる、というのには嘘です。汚いことをさせていないから嫌がっていることだけのことです。そして彼らが「おばあちゃん、おじいちゃんのおシメを換えると、ありがとうと言つてくれる。自分は十五年生きてきて、こんなに人から感謝されたことがあつただろうか。自分のような人間でもこんなに感謝してくれる」と言っていました。

結局は、福祉をやつてみて、もう少し勉強したらもっといい介護ができるという理

由で、当初十人ぐらいの進学希望が、卒業時点では二十人が進学するという結果となりました。進学した子どもたちがどのようになり成果を上げていくかということが、今後につなげていくと思えます。

### 大学進学へのモチベーション(動機づけ)を考える

大学へ行くモチベーション作りがしやすいのは、実は専門高校の方なのです。私は、進学者の多い高校の校長を集めて、モチベーションを作る必要性を言います。そのために、一年生の時になぜ勉強するかという授業を開くよう勧めています。その科目は、総合学科が原則的に必修科目としている「産業社会と人間」です。

この科目は、一年生の時にいろいろな企業へ行つてみたり、いろいろな仕事をしていく人の話を聞いてみたり、世の中のいろいろな仕組みを学んでいくなかで、義務教育後の教育を、自分で学習者の立場で能動的にやつていくのだが、いったい何をやるためにどうするのか、ということを教える科目です。

この考えについて、中学、高校の先生は、「十五歳の子にそんなことができるわけがない。何も分かつていないのだから十八歳までは盲目的に勉強させればいい。あとは大学に入って考えればいいんだ」と言いました。しかし、大学生にそんな力があるのでしょうか。「学生がみんな証券会社へ行つてしまふ」と東工大の先生が嘆いていました。

十五歳の時にできないものは、十八歳の時にもできないし、二十二歳の時にもできないのです。

大学へ行くモチベーションを作るため、普通科高校でも「産業社会と人間」をやろう、と私は提案しているわけですが、それ

改組しましたが、平成八年度及び平成九年度においても一、二校作るよう準備を進めております。

文部省の概念としては、総合学科が将来的に主流の高等学校になっていくという考え方であり、三十、五十年経ってこの新しいシステムが定着していけば、現在五千校ある高等学校のうち、六割程度は総合学科、二割は普通科、二割は専門学科というように形に落ち着くのが、将来的な高等学校像であろうと私は想像しております。

子どもたちが全員高等学校に行くようになれば、その子どもたちが高等学校へ行くモチベーションの有様がいろいろ違ってきているので、高等学校教育も多様化していくべきだ、という議論があります。

この入口の議論からすると、今回のフリーカリキュラム化への移行は、あたかも今までの高等学校についていけない層が入学してくることへの対応ではないかと受け取られがちですが、それは誤解であり、実はこの総合学科というのは、出口の側からも熱い期待が寄せられています。

残念ながら、大学の方からはまだ熱い期待は寄せられていませんが、いわゆる社会、産業界からは熱い期待が寄せられており、経済同友会とか日経連でも、総合学科にたいへん期待しているということが言われており、これからの激動の社会を生きていく人間として、自ら考え自ら行動する人間を欲しております。

今回の小・中・高等学校の学習指導要領の改訂のテーマは、一貫して、新しい学力観の育成であり、新しい学力観とは、自ら考え、自ら行動する力をもった子どもを育てることであり、社会のニーズに合わせて行っているわけです。

## 今回の学習指導要領の改訂内容 —義務教育とポスト義務教育—

今回の学習指導要領の改訂が、前三回の改訂とどう違うかという点、前三回は、中央教育審議会の議論を経て、教育課程審議会が議論するといういわば教育界内部で作った指導要領ですが、今回は、臨時教育審議会の答申を受けて、教育課程審議会がその要求に応える指導要領を作ったものです。

総合学科の設置、単位制高校を一般的なものにしていく、大学の単位互換と同じように他の高校で受けた授業も単位として認めること、高等学校以外の教育期間で受けたものを単位として認めること、などの改革が行われました。

これは大学に近い考え方になっており、今までの初等中等教育と大幅に変わっていくものだと私は思っております。次の指導要領改訂はすでに始まっており、もう一、二回改訂を加えていくうちに、高等学校の学習指導要領は、総則だけになってしまおうだろうということをおっしゃりたいと思います。

今までの初等教育、中等教育、高等教育という学校教育三段階論をやめたものだと私は理解しております。つまり、初等教育、中等教育、高等教育ではなく、義務教育とポスト義務教育という考え方を整理していかなければならぬと思います。

高等学校教育は、中学校教育でやっていくことを、もう一度グレードを上げてやっていくというのが一般的であったわけですが、今後は、中等教育と一緒に括るのはふさわしくなくなっているということであり、義務教育は画一的に基礎、基本を習得していく国民的教育としてやっていくという考え方で、前期中等教育は初等教育と結合していくことになる。そして、ポスト義務教

育の中で、後期中等教育というのは高等教育の方に近づいていくということであり、私は、おそらく六・三・三・四制が、九・七制に変わっていくだろうということを今回の学習指導要領は示していると思います。

少なくとも、臨時教育審議会が示した生涯学習社会という考えに立って物事が移行していくならば、私は、将来的には九年制の義務教育学校へ移行していくべきだと考えております。学校教育に求められるものというのがはつきり変質したということを念頭に置く必要があり、臨時教育審議会は、学校教育に求めているものは変わってきたのだということをおっしゃるから、それが国の方針として決まった以上は、私たちはその方向へ進んでいかなければならぬわけです。

## 新しい学力観—百年生きる地球人のための教育システム

新しい学力観とはどういうものなのか。今までの学校教育というのは、五十年生きる日本人を作るためのシステムであったわけですが、新しい学力観というのは、それに対してわかりやすく対比的に言うならば、百年生きる地球人を作っていく学校システムへ転換していかねばならない、ということであり、

明治の教育改革、昭和の教育改革、そして第三の教育改革として平成の改革を行っているわけですが、第二段階目の昭和の教育改革は昭和二十年代に作ったもので、当時は平均寿命が五十年であり、五十年生きるだけの力を授けられよと考えたのは当然だと思えます。

しかし、当時の新制高校の考え方は単位制であり、今回の総合学科にきわめて近いものであります。ただ、そういうものは昭和二十年代に合わなかったわけで、徐々

に画一的な高等学校に変わっていったわけです。それが、今の子どもたちは、当然に百年の人生を生きて考えなければならぬので、五十年生きることに対応した教育システムから百年生きることに対応した教育システムに変わらなければならぬわけです。

このことについて、臨時教育審議会では、社会の変化と言いつつ、また長寿化と言いつつ、肉体が長くなるわけが、これは、肉体が長くなる世を生きていくということにとどまらず、経済企画庁の国民白書に「日本人のライフスタイルが変わってきていることに、社会全体が対応していかなければ、行き詰まってしまう」と書いてあるように、人生に第三ステージができてきたことを考えていかなければならないということです。したがって、今回の改革は、人類の歴史に残る大改革であると言っても決して大袈裟ではないと思えます。

五十年生きるようになってくるまでは、人生というのは常に二つの時期の繰り返しだったわけで、成長して力を蓄えていく時期、そして今度はその力を生かして働く時期という、第一ステージと第二ステージの繰り返しでありました。

ところが、二十世紀後半になって飛躍的に寿命が伸びて、生産手段が発達して科学技術が高度化したり、いろいろなことがあるなかで、死ぬまで働かなくても生活できるようになってきた。つまり、一生懸命蓄えて、使うという二つの時期だけでなく、第三の時期ができてきたということです。これが、生涯学習が求められる必要性であり、第三の時期をどう生きていくかということです。

人生五十年生きる日本人であった時代は、第二ステージに役立つようにすればよかつたから、いい学校に行つて、いい会社に入ると、ということが人間の幸福につながった

をやったら数学や英語に時間が減るので、絶対だめだと言われます。このことは、大学側に数学や英語を猛烈にやってきた子が欲しいのか、少し数学や英語はやっていないが、そういうモチベーションを持った子が欲しいのか考えてもらう必要があります。しかし、この授業時間議論は、実はおかしいのです。学校でたくさん授業をやる方が大学に入れるというものでなく、モチベーションさえきちんとしてきていけば、自分で自発的に勉強するものです。自分で能動的に勉強することが大切なことです。したがって、少しの時間は潰しても、「産業界と人間」でモチベーションを形成したほうが良いということで、今盛んに呼び掛けています。

**最後に「共生の時代を生きるために**

それでは、最後にまとめさせていただきます。先ほど、百年生きる地球人であると言いました。今までは、とにかくよい学校に入り、よい会社に入ったら終身雇用の世界がありました。この終身雇用という、日本にしかなかった神話も今終りを告げようとしています。産業の空洞化といわれる中で、地球で通用する人間を探していくということとあります。

二十一世紀は共生の時代であり、人類が生き残っていくために地球上で皆で共生していかなければなりません。臨時教育審議会は十年前にこのことを予言しているわけです。したがって、今私たちが行っている新しい学力観、教育改革を何としてでも成し遂げて、地球上で共生していける、いろいろなところで活躍していける若者を送り出していかねばならないのです。

私は、普通科高校で受験勉強ばかりしている子どもが心配です。専門学校に通って

いる子どもたちが学んでいることは、今後絶対に必要なことであり、この子どもたちは二十一世紀を必ず生き抜いていけると思っています。普通科高校の子どもたちが、モチベーションを持って大学に行き、スペシャリストとしての力を持ってくれればよいのですが、漫然と大学に行って、漫然とホワイトカラーになろうと思っているならば、二十一世紀は生きて行けません。

二十一世紀がどうなるかということは私にはわかりませんが、二十世紀とは違う時代が来るという認識に立って、どんな時代になっても生き抜いていけるような力を、子どもたちに与えてやる必要があります。過去何万年の中でこんな夢の多い世代はありません。しかし、地球上にいっぱい夢が転がっているのに、私たち大人が子どもに遮断幕をかけて、受験勉強にかり立てているから子どもに夢がないのです。それは、時代が悪いのでも子どもが悪いのでもなく、私たち大人が考えを変えて、彼等に将来の夢を見せてやらなければなりません。いっぱい夢があるということ、幼児教育、家庭教育、地域の教育、社会教育、小・中・高の教育で徹底してやらなければならぬという考え方で、我々は高校以下の教育を進めておきます。

大学改革と高校以下の改革が、期を一にして進んでいくならば、大学にとっても、高校にとっても、そしてなによりも子どもたち自身にとっても、ハッピーな学校教育というものがつくれるのではないかと思います。今後ともいろいろな場面でご協力をお願いします。またお願いにあがることがあると思いますが、意のあるところをお汲み取りいただき、広島大学の皆様方にご理解とご協力を賜ることをお願いしまして、お話を終わらせていただきます。

(てらわき・けん)

日本ではあまり知られていませんが、オリエンテーリング(OL)にも、他のスポーツ競技と同じように世界選手権等の世界大会が開催されています。そのなかの一つである、二十歳以下の「世界一」を決める大会、ジュニア世界選手権(JWOC)に、私は日本代表の一員として参加することができました。

日本ではOLを大学から始める人が大多数ですが、幼い頃からOLをやっていた私にとっては、JWOCに出場することは一つの目標であり、夢でもありました。そのうえ、今回のJWOCは北欧のデンマークで行われるとあって、一度は本場北欧(北欧はOLの発祥地)のコースを走ってみたいと思っていた私にとって、二つもの夢を一度にかなえることができたのは、非常に幸運でした。

こうして挑んだデンマークの森は、日本の森とは違い、疎林が多く、どこも視界が良くて気持ち良く走ることができました。やはり、世界とのレベルの差は大きく、あまり良い結果とはなりません。しかし、私にとっては今後のOLに役立つものを多く得ることができました。

最後に、今回の海外遠征にご支援、ご声援くださったかたがたに心からお礼申し上げます。(よしむら・みつり)

**ジュニア世界オリエンテーリング選手権に参加して**

工学部第四類(建設系)二年 ◆ 吉村 充功

- (成績)
- ◎参加国33か国 参加者人数325名
  - ☆7月9日 ショート (4.7km/165m/11ポスト) 1位 25分50秒 108位(吉村) 36分58秒
  - ☆7月11日 クラシカル (11.5km/505m/21ポスト) 1位 1時間10分02秒 118位(吉村) 1時間42分41秒
  - ☆7月12日 リレー(27か国) 1位 デンマーク 2時間17分23秒 22位 日本 3時間12分06秒



▲リレー第一走者出走前の風景 (デンマークのホーセンス市にて)

**日本代表選手激励金のお礼**  
このたび、一九九五オリエンテーリングジュニア世界選手権大会に出場しました吉村充功君の激励金の募金に際しては、多くの方々のご賛同を得ましたことを厚く御礼申し上げます。お陰様をもちまして、左記のとおり多額のご出宝をいただきました。学生の励みとなりベストを尽くすことができました。これもひとえに皆様方のご援助の賜物と厚く感謝いたしております。誌面をかりて改めて御礼申し上げます。

吉村充功君を激励するご出宝 七十五件 総額 十五万六千円

- 学 長(体育会会長) 原田康夫
- 学生部長(体育会副会長) 西村清巳
- 工学部長(体育会顧問) 茂里一紘
- 体育会オリエンテーリング部部長 植田康成